「特別の教科　道徳」に向けた道徳の授業の在り方（一年次）
― 広島県の道徳教育実態調査における指導と評価の現状と課題を踏まえて ―

【研　究　者】
企画部　　指導主事　中野　詠美子・永井　博美

【研究指導者】　　兵庫教育大学大学院　教授　谷田　増幸
【研究協力員】
東広島市立寺西小学校　教諭　長谷川　純子　　東広島市立西条中学校　教諭　鈴木　晶雄
東広島市立中央中学校　教諭　吉野　裕美

研究の要約

本研究は，広島県の公立小学校・中学校を対象として行った道徳教育実態調査の分析を踏まえ，「特別の教科　道徳（以下，道徳科とする。）」において，児童生徒の主体的な学びにつないでいくために，「考え，議論する」道徳科への質的転換を図る方策を提案するものである。

研究の方法としては，広島県の公立小学校・中学校の道徳の授業等において，教師が困っていること等について明らかにするために悉皆調査を実施した。その結果，教師が困っている上位三項目は，「道徳の授業における評価について（以下，「評価」とする。）」「道徳の授業における指導方法について（以下，「指導方法」とする。）」「道徳の授業の構想について（以下，「授業の構想」とする。）」であることが分かった（以下，「指導方法」及び「授業の構想」については，「指導」とする。）。さらに，この上位三項目を「指導」と「評価」の視点で分け，χ^2検定を行った結果，教師が困っていると感じている意識には，連関性があることが分かった。これらのことから，広島県の公立小学校・中学校は，道徳の授業において「授業の構想」から「評価」に至るまでの「指導」と「評価」に困っている割合が高く，これは，国の課題と一致していることが分かった。この結果を踏まえ，「考え，議論する」道徳科への質的転換を図るポイントとして，①「指導」と「評価」の一体化を図る工夫を行うこと，②児童生徒が「考え，議論する」ための指導を明確にすること，③「考え，議論する」ことの評価を明確にすることの３点を設定した。本年度は，①のポイントに重点をおいて「道徳リードシート（試案）」を作成し，研究協力員の小学校・中学校の道徳の授業において活用した。その結果，ねらいを基に，児童生徒に何を考えさせ，教師が何を評価するのかを明確にすることができた。

二年次である来年度は，試案を基に三つのポイントを踏まえた「道徳リードシート」の改善を行い，その効果を検証していく。

キーワード：道徳科　考え，議論する　道徳リードシート（試案）　指導方法　評価

目　次

はじめに ･････････････････････････････････ 37
Ⅰ　研究の目的と方法 ･････････････････････ 38
Ⅱ　研究の基本的な考え方 ･････････････････ 38
Ⅲ　道徳教育実態調査の結果，分析及び考察 ･･･ 40
Ⅳ　本県の道徳の授業の現状と課題を踏まえ「考え，議論する」道徳科への質的転換に向けて ･ 53
Ⅴ　成果及び来年度への取組 ･･････････････ 57
おわりに ･････････････････････････････････ 57
資料 ･････････････････････････････････････ 59

はじめに

平成26年にまとめられた道徳教育の充実に向けた改善方策（答申）（中央教育審議会）では，「道徳教育を通じて育成される道徳性は，『豊かな心』はもちろん，『確かな学力』や『健やかな体』の基盤ともなり，児童生徒一人一人の『生きる力』を根本で支えるものである。また，道徳教育は，個人のよりよい人生の実現はもとより，国家・社会の持続的発展にとっても極めて重要な意義をもっている。」[1)]と示されている。児童生徒の自制心や規範意識の希

薄化等，児童生徒の心と体の状況に関わる課題が指摘される中，学校における集団生活の場としての機能を十分に生かし，道徳教育の一層の充実を図ることは喫緊の課題である。とりわけ，道徳の授業において，互いに学び合い，支え合い，深め合う学習を通して，他者と関わり合う等の指導の工夫を行うことで，豊かな人間関係が育まれるとともに，児童生徒が主体的に道徳的価値の自覚を深めていくといった「主体的な学び」につながると考える。

文部科学省「道徳教育の抜本的改善・充実」のパンフレット（平成27年）では，これまでの道徳の時間の課題例として，「『道徳の時間』は，各教科等と比べて軽視されがち」だったこと，「読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導」がなされてきたこと，「発達の段階などを十分に踏まえず，児童生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業」が挙げられている。

また，文部科学省が平成24年５月～６月に全公立小学校・中学校等を対象として実施した道徳教育実施状況調査では，「貴校において，道徳教育を実施する上での課題としてどのようなことが考えられますか。」という質問に対する回答として「指導の効果を把握することが困難である」を選択した学校は全体の47％であり，半数近くの小学校・中学校が自らの指導の効果を把握する難しさを感じているという結果が出ている。ちなみに，指導と評価に関して，柳沼良太（2013）は，これまで道徳授業だけでは客観的で信頼性のある評価方法が確立できず，道徳の目標や指導方法を実証的に検証して，その改善を図ったり，子供の学習意欲の向上に活かしたりすることが十分ではなかったとしている。

これらの現状と課題を踏まえ，平成27年に道徳に係る小学校・中学校一部改正学習指導要領が告示され道徳科が位置付けられた。これからの時代に求められる資質・能力の育成や，アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善を先取りし，「考え，議論する」道徳科への転換により児童生徒の道徳性を育てようとするものである。

そこで，本研究は道徳科の先行実施が可能となった現在，広島県の道徳教育の現状と実態を踏まえ，児童生徒の主体的な学びにつないでいくために「考え，議論する」道徳科への質的転換を図っていきたいと考える。

Ⅰ　研究の目的と方法

１　研究の目的

本研究は，広島県の公立小学校・中学校を対象として行った道徳教育実態調査の結果を踏まえ，児童生徒の主体的な学びにつなぐ「考え，議論する」道徳科への質的転換を図る方策を提案するものである。

２　研究の方法

○　道徳教育実態調査に係るアンケート用紙を作成する。
○　道徳教育実態調査を実施・集計する。
○　道徳教育実態調査結果を踏まえた理論の構築を行う。
○　「道徳リードシート（試案）」を作成し，道徳の授業において活用する。
○　研究のまとめを行う。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

本研究は，前述のように道徳科の全面実施を見据えて進めていくものである。ただし，現時点（平成28年３月８日現在）では，「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」における方針が明確に打ち出されていない。

そこで，次の３点を基本的な考え方として実施することとする。

○　「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」の直近の審議内容を拠り所に，研究を進める。
○　道徳教育実態調査は，現行の学習指導要領及び一部改正学習指導要領を基に実施する。
○　「道徳リードシート（試案）」は，一部改正学習指導要領を基に作成する。

１　道徳の時間から道徳科への転換について

教育課程企画特別部会論点整理（平成27年）では，道徳の特別教科化の大きな目的は，「読み物道徳」から脱却し，問題解決型の学習や体験的な学習などを通じて，自分ならどのように行動・実践するかを考えさせ，自分とは異なる意見と向かい合い議論する中で，道徳的価値について多面的・多角的に学び，実践へと結び付け，更に習慣化していく指導へと転換することと示されている。

また，小・中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編（平成27年）（以下，「道徳科解説」とする。）には，発達の段階に応じ，答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え，向き合う「考える道徳」「議論する道徳」へと転換を図るものと述べられている。

西野真由美（2015）は，授業において答えが一つではない問いを探求する力を育てるために求められるものは，様々な意見が単に並列的に引き出される授業ではなく，異なる意見や見方に出会って自分の考えを深め，互いの理解を深め合い，共によりよい考えを創っていこうとする協同探求的で創造的なプロセスであると述べている。

これらのことから，本研究では「考え，議論する」を次のように捉え，目指す児童生徒の姿とする。

> 「考え，議論する」とは
> 答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉えるとともに，異なる意見や見方に出会って自分の考えを深め，互いの理解を深め合い，共によりよい考えを創っていこうとするこ

そこで，道徳の時間から道徳科は何を引き継ぎ，新たにどのような創意工夫や配慮が求められているのかについての整理が必要と考え，道徳の授業における目標，指導，評価について，次に述べることとする。

(1) 目標に係る改訂について

道徳の授業の目標の改訂について，表１に示す。

表１　小学校における道徳の授業の目標の改訂について[1]

改訂前	改訂後
道徳の時間の目標	道徳科の目標
道徳教育の目標は，第１章総則の第１の２に示すところにより，学校の教育活動全体を通じて，道徳的な心情，判断力，実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする。 道徳の時間においては，以上の道徳教育の目標に基づき，各教科，外国語活動（※１），総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら，計画的，発展的な指導によってこれを補充，深化，統合し，道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め（※２），道徳的実践力を育成するものとする。	第１章総則の第１の２に示す道徳教育の目標に基づき，よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため，道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を（※３）多面的・多角的に考え，自己の生き方（※４）についての考えを深める学習を通して，道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる。

※１：中学校「外国語活動」なし
※２：中学校「道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め」
※３：中学校「広い視野から」追記
※４：中学校「人間としての生き方」

道徳教育の目標と道徳科の目標を，各々の役割と関連性を明確にするため，道徳科の目標を「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」として，学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の目標と同一であることが分かりやすい表現にするとともに，従前，道徳の時間の目標に定めていた「各教科等との密接な関連」や「計画的，発展的な指導による補充，深化，統合」は，「第３　指導計画の作成と内容の取扱い」に整理した上で，表現が改められた。

また，道徳的価値について自分との関わりも含めて理解し，それに基づいて内省し，多面的・多角的に考え，判断する能力，道徳的心情，道徳的行為を行うための意欲や態度を育てるという趣旨を明確化するため，従前の「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深める」ことは，学習活動を具体化して「道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習」と改められた。

さらに，これらを通じて，よりよく生きていくための資質・能力を培うという趣旨を明確化するため，従前の「道徳的実践力を育成する」ことは，具体的に「道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる」と改められた。

(2) 指導に係る改訂について

ア　内容の改訂について

小学校から中学校までの内容の体系性を高めるとともに，構成やねらいを分かりやすく示して指導の効果を上げるなどの観点から，それぞれの内容項目に手掛かりとなる「善悪の判断，自律，自由と責任」などの言葉を付記した。

表２は，道徳の内容項目の改訂について示す。

表２　道徳の内容項目の改訂について[2]

改訂前	改訂後
道徳の時間における内容項目のまとまりの視点	道徳科における内容項目のまとまりの視点
１　主として自分自身に関すること。	A　主として自分自身に関すること。
２　主として他の人とのかかわりに関すること。	B　主として人との関わりに関すること。
３　主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること。	C　主として集団や社会との関わりに関すること。
４　主として集団や社会とのかかわりに関すること。	D　主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること。

内容項目のまとまりを示していた視点については，四つの視点によって内容項目を構成して示すという考え方は従前どおりとしつつ，これまで１から４の順序で示していた視点を，児童生徒にとっての対象の広がりに即して整理し，ＡからＤの視点とし

て順序を改めた。

また，内容項目数の改訂は，表３に示す。

表３　道徳の内容項目数の改訂について[3]

学年	改訂前 道徳の時間における内容項目数	改訂後 道徳科における内容項目数
小学校第１学年及び第２学年	16	19
小学校第３学年及び第４学年	18	20
小学校第５学年及び第６学年	22	22
中学校	24	22

イ　指導計画の作成と内容の取扱いに係る改訂について

谷田増幸（平成27年）は「『特別の教科　道徳』の特質」において，次のように述べている。

「『第３　指導計画の作成と内容の取扱い』の２には，内容の指導に当たっての配慮事項が示されている。その中で指導方法の観点から特筆すべきことを３点挙げる。

第一に，これまでの道徳性を養うことに関わって，その『意義について，児童生徒自らが考え，理解し，主体的に学習に取り組むことができるようにすること。』が加筆された。

第二に，言語活動に関わって，『児童生徒が多様な感じ方や考え方に接する中で，考えを深め，判断し，表現する力などを育むことができるよう』にその充実を図ることを求めている。

第三に，『指導のねらいに即して，問題解決的な学習，道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れる』こと等を例示して，指導方法の工夫を求められている。」[2]

このように，目標における学習の諸側面と連動しながら，自己又は人間としての生き方について多角的に考えさせるため，多様で効果的な指導方法の積極的な導入を求め，道徳科としての特質を更新しているようにも捉えられる。

(3) 道徳の授業に関する評価について

評価については，児童生徒の成長の様子を把握することが基本であり，表４に示すとおり，数値評価を行わないことは従前と同様となっている。

表４　道徳の授業の評価の改訂について[4]

改訂前	改訂後
児童（生徒）の道徳性については，常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし，数値などによる評価は行わないものとする。	児童（生徒）の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し，指導に生かすよう努める必要がある。ただし，数値などによる評価は行わないものとする。

道徳科の評価の具体的な在り方については，文部科学省において，次の点を前提に専門的に検討が行われており，教師用指導資料の作成や指導要録の改正が行われる予定である。

・数値による評価ではなく，記述式であること。
・他の児童生徒との比較による相対評価ではなく，児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止め，励ます個人内評価として行うこと。
・他の児童生徒と比較して優劣を決めるような評価はなじまないことに留意する必要があること。
・個々の内容項目ごとではなく，大くくりなまとまりを踏まえた評価を行うこと。
・発達障害等の児童生徒についての配慮すべき観点等を学校や教員間で共有すること。
・現在の指導要録の書式における「総合的な学習の時間の記録」「特別活動の記録」「行動の記録」及び「総合所見及び指導上参考となる諸事項」などの既存の欄も含めて，その在り方を総合的に見直すこと。

「指導」と「評価」の一体化について，小学校「道徳科解説」には，「確かな指導観を基に，明確な意図をもって指導や指導方法の計画を立て，学習指導過程で期待する児童の学習を具体的な姿で表したものが観点となる。こうした観点をもつことで，指導と評価の一体化が実現することになる。このように学習指導過程に関する評価の資料となるものは，児童の学習状況である。」[3] と示されている。

また，中学校「道徳科解説」においては，「道徳性を養うことを学習活動として行う道徳科の指導では，その学習状況を適切に把握し評価することが求められる。生徒の学習状況は指導によって変わる。道徳科における生徒の学習状況の把握と評価は，教師が道徳科における指導と評価の考え方について理解を深め，１単位時間の授業で期待する生徒の学習を明確にした指導計画の作成が求められる。」[4] と示されている。

これらのことから，児童生徒の学習状況は指導で変わり，教師が道徳の授業における「指導」と「評価」の考え方について理解を深めることが重要であると言える。

Ⅲ　実態調査の結果，分析及び考察

１　道徳教育実態調査について

(1) 調査の目的

広島県内の公立小学校・中学校の道徳の授業等

において，教師が困っていることについての現状と課題を明らかにする。

(2) 基本方針

○　広島県立教育センターの平成27年度道徳教育に係る専門研修講座の受講者40名（小学校23名，中学校15名，高等学校２名）に対して，道徳の時間等について教師が困っていることについて把握する予備調査を行ったところ，「計画」「体制」「指導」「連携」「評価」の五つの視点について困っていることが分かった。この結果を踏まえ，教師が困っていると感じていること等を調べるアンケートを作成・実施し，分析及び考察を行う。

○　道徳の授業等について，教師が困っていると感じていること等についての現状と課題を明らかにする。

(3) 調査の基本構成

調査の基本構成について表５に示す。道徳教育と道徳の授業に関して，「計画」「体制」「指導」「連携」「評価」の五つの視点に係る12調査項目として構成した。

(4) 調査方法，調査対象及び調査機関

○　調査方法

質問紙調査

○　調査対象

広島県公立小学校　485 校（回答のあった学校数 407 校，回答率84％）

※うち１校は，文部科学省研究開発学校指定（平成25年～28年）のため，問１・２のみ回答

広島県公立中学校　236 校（回答のあった学校数 200 校，回答率85％）

上記，各学校の道徳教育を主に担当する教師（道徳教育推進教師）

○　調査期間

平成27年10月２日（金）～20日（火）

(5) 集計方法

集計については，調査項目ごとに単純集計を行い，

表５　調査の基本構成

調査項目				調査項目の内容
道徳教育に係る質問	問1	指導	自校の道徳教育に係る重点目標を踏まえた指導について	①自校の重点目標を踏まえた指導方法　②自校の重点目標を踏まえた指導内容　③自校の重点目標を踏まえた指導の在り方　④自校の重点目標の設定　⑤その他，困っている内容（自由記述）
	問2	指導	道徳教育の全体計画を意識した指導について	①全教師の主体的な参画　②全体計画を基にした道徳教育の実施　③全体計画の評価・改善のための体制　④全教師の共通理解を図る方法と場の設定　⑤その他，困っている内容（自由記述）
道徳の授業に係る質問	問3	体制	道徳の授業に関する校内研修について	①道徳の授業に関する研修時間　②道徳の授業に関する研修内容　③道徳の授業に関する研修の講師招聘・連携　④道徳の授業に関する研修の教職員のニーズの把握　⑤その他，困っている内容（自由記述）
	問4	指導	道徳の授業における各教科等との関連を図る指導について	①道徳の授業における道徳教育の全体計画（別葉）を踏まえた指導　②道徳の授業における各教科等の関連を図る指導方法の工夫（発問の工夫等）　③その他，困っている内容（自由記述）
	問5	計画	道徳の授業に係る年間指導計画の作成とその活用について	①道徳の授業に係る年間指導計画の作成方法　②道徳の授業に係る年間指導計画の効果的な活用　③道徳の授業に係る年間指導計画への評価・改善　④その他，困っている内容（自由記述）
	問6	指導	道徳の授業の特質を踏まえた指導について	①道徳の授業の特質の理解　②道徳の授業の特質を踏まえた指導　③その他，困っている内容（自由記述）
	問7	指導	道徳の授業の構想について	①児童生徒の実態把握　②ねらいの設定　③資料の吟味　④資料の分析　⑤発問の構成　⑥学習指導過程の構想　⑦事前指導・事後指導　⑧その他，困っている内容（自由記述）
	問8	指導	道徳の授業における指導方法について	①読み物資料の利用　②資料を提示する工夫　③発問の工夫　④話合いの工夫　⑤書く活動の工夫　⑥動作化，役割演技等の表現活動の工夫　⑦板書を生かす工夫　⑧説話の工夫　⑨ＩＣＴの利用（パソコン等）　⑩その他，困っている内容（自由記述）
	問9	連携	道徳の授業における家庭や地域社会との連携について	①地域社会等における人材の把握　②連携する時間の確保　③連携する方法　④継続的な連携　⑤その他，困っている内容（自由記述）
	問10	評価	道徳の授業における評価について	①評価の観点　②評価の方法　③評価の場面　④評価の妥当性・信頼性　⑤その他，困っている内容（自由記述）
	問 11		問１から問 10 の中で，特に課題となっている項目番号及びその理由	
	問 12		道徳の授業の評価に係る取組例（評価方法，評価場面等を含めて）	

結果を百分率や合計で表す。また，自由記述については，内容ごとに分類する。

２　実態調査の結果，分析及び考察

本調査結果については，次のように分析・考察を行う。

なお，本研究に係る調査は，　道徳科への移行期における調査であり，回答校は，道徳の時間及び道徳科の両方を意識して回答したものと考えられる。

(1) 全体の結果及び分析

道徳の授業等の「計画」「体制」「指導」「連携」「評価」の五つの視点で構成した質問（四段階評定尺度法）について，広島県公立小学校・中学校の教師が困っていること等をまとめたものが，図１である。

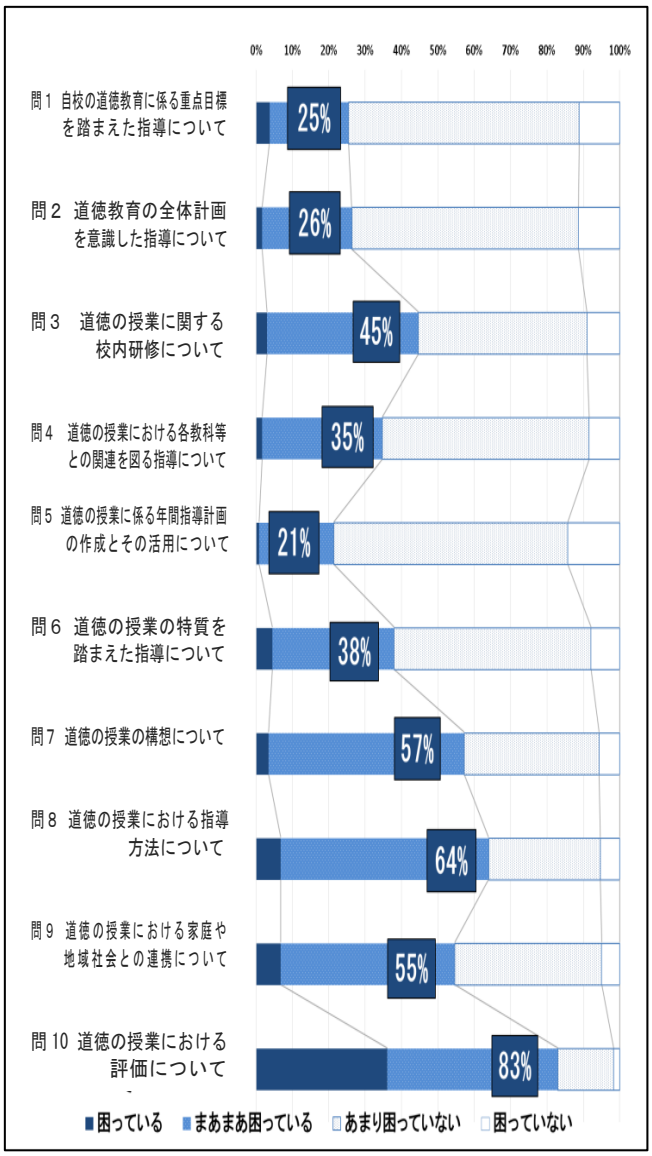


図１　広島県公立小学校・中学校の教師が道徳の授業等に関して困っていると感じていること

教師が困っていると感じていることは，「問10 道徳の授業における評価について（以下，「問10 評価」とする。）」が 83%で最も高い数値であった。続いて，「問８　道徳の授業における指導方法について（以下，「問８　指導方法」とする。）」が64%，「問７　道徳の授業の構想について（以下，「問７　授業の構想」とする。）」が57%という結果となった。

また，問１から問10の質問項目で，特に困っていると感じているものは「問10　評価」の 397 校（全体の約65%）であった。

これらのことから，本県の公立小学校・中学校において困っていると感じている上位三つの質問は，「問10　評価」「問８　指導方法」「問７　授業の構想」であり，その中でも特に，「問 10　評価」については，困っていると感じていることが分かった（以下，「問８　指導方法」及び「問７　授業の構想」については，「指導」とする。）。この三つの質問を視点で分類すると「評価」「指導」である。

(2) 質問毎の結果，分析及び考察

次からは，質問毎の結果及び考察を行っていくものとする。

ア　自校の道徳教育に係る重点目標を踏まえた指導について

「自校の道徳教育に係る重点目標を踏まえた指導について」のアンケート結果を図２及び図３に示す。

自校の道徳教育に係る重点目標を踏まえた指導について，「困っている」「まあまあ困っている」と回答した学校（全体）は26%であった。校種別にみると，小学校21%，中学校35%と14ポイントの差が見られ，小学校よりも中学校が，重点目標を踏まえた指導について困っていることが分かった。

その学校が，特に困っていると感じている内容について，図３に示す。重点目標を踏まえた「指導の在り方」は，小学校が14%，中学校が15%，続いて「指導方法」が，小学校12%，中学校14%という結果になった。自由記述については，重点目標が多く取組の焦点化が図られていないことや教職員の共通理解を図った上での指導，校内研修の少なさ等を挙げている学校があった。

これらのことから，重点目標を踏まえた指導については，校内研修等で全教職員が共通理解を図り，それぞれの担当学年や教科等において，どのように指導していくのかが分からないという教師がいることが分かった。

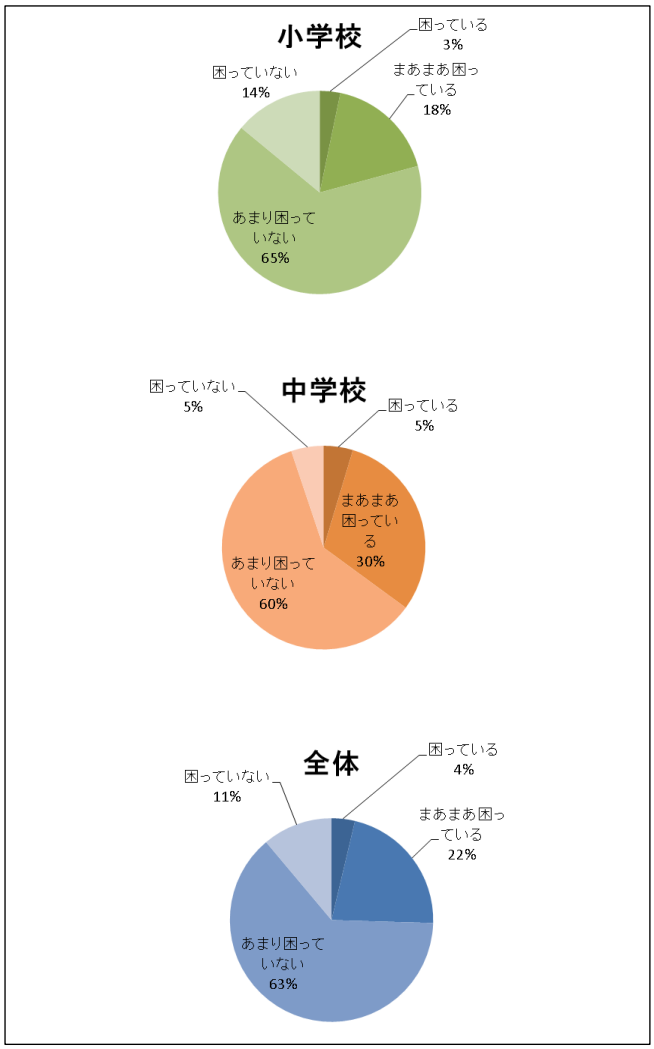
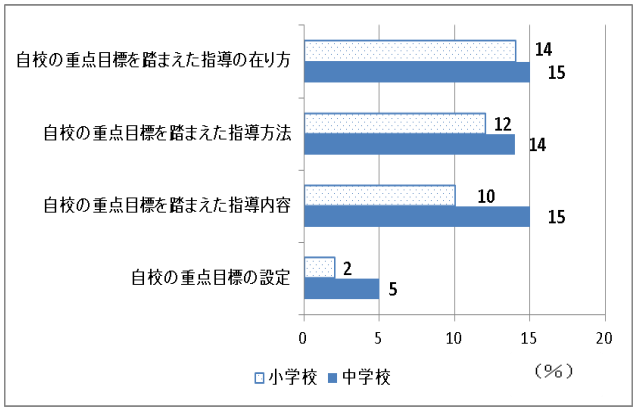


図２　自校の道徳教育に係る重点目標を踏まえた指導について



■その他の困っている内容（自由記述）
- （校内の）重点項目が多すぎて，焦点化できていない。
- 自校の重点目標を全教職員が意識した上で，どのように指導をするか。
- 重点目標を踏まえた指導についての校内研修が少ない。

図３　自校の道徳教育に係る重点目標を踏まえた指導について困っている内容

イ　道徳教育の全体計画を意識した指導について

「道徳教育の全体計画を意識した指導について」のアンケート結果を図４及び図５に示す。

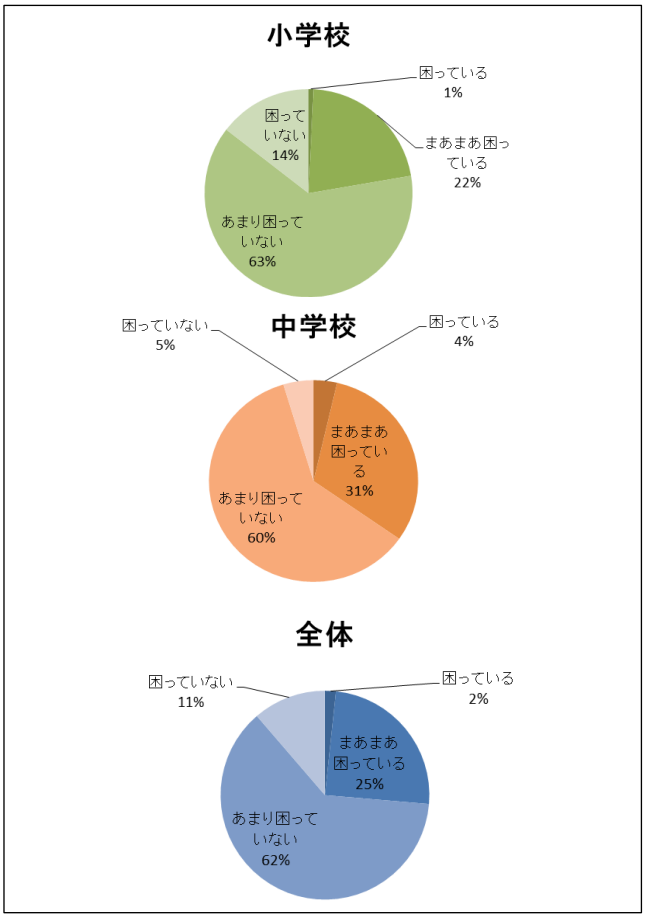
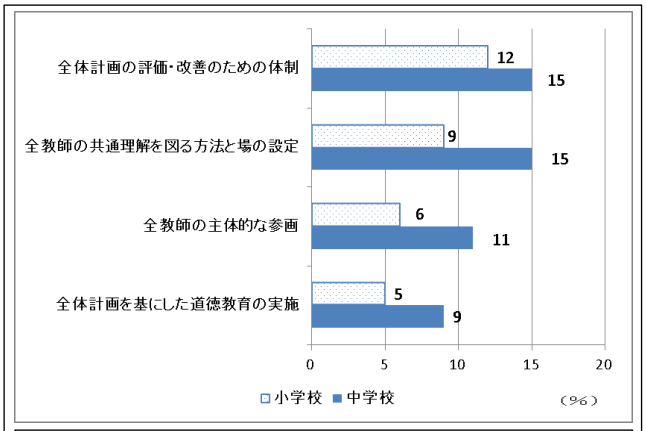


図４　道徳教育の全体計画を意識した指導について



■その他の困っている内容（自由記述）
- 全体計画と指導内容をどのようにリンクさせればよいのかが分からない。

図５　道徳教育の全体計画を意識した指導について困っている内容

道徳教育の全体計画を意識した指導について，図４のように，「困っている」「まあまあ困ってい

る」と回答した学校（全体）は27%であった。校種別には，小学校23%，中学校35%と12ポイントの差が見られ，小学校よりも中学校で，道徳教育の全体計画を意識した指導について困っていることが分かった。

その学校が，図５に示しているように，特に課題と感じている内容として，最も多かったのは「全体計画の評価・改善のための体制」で小学校12%，中学校15%であった。中学校では「全教師の共通理解を図る方法と場の設定」も15%であった。

自由記述では，「全体計画と指導内容の関連のさせ方が分からない」と挙げている学校があった。

これらのことから，全体計画を意識した指導においては，小学校では計画を基にした道徳教育の実施について，中学校では評価・改善のための体制づくり及び全教師の共通理解を図る点について困っていることが分かった。

ウ　道徳の授業に関する校内研修について

「道徳の授業に関する校内研修について」のアンケート結果を図６及び図７に示す。

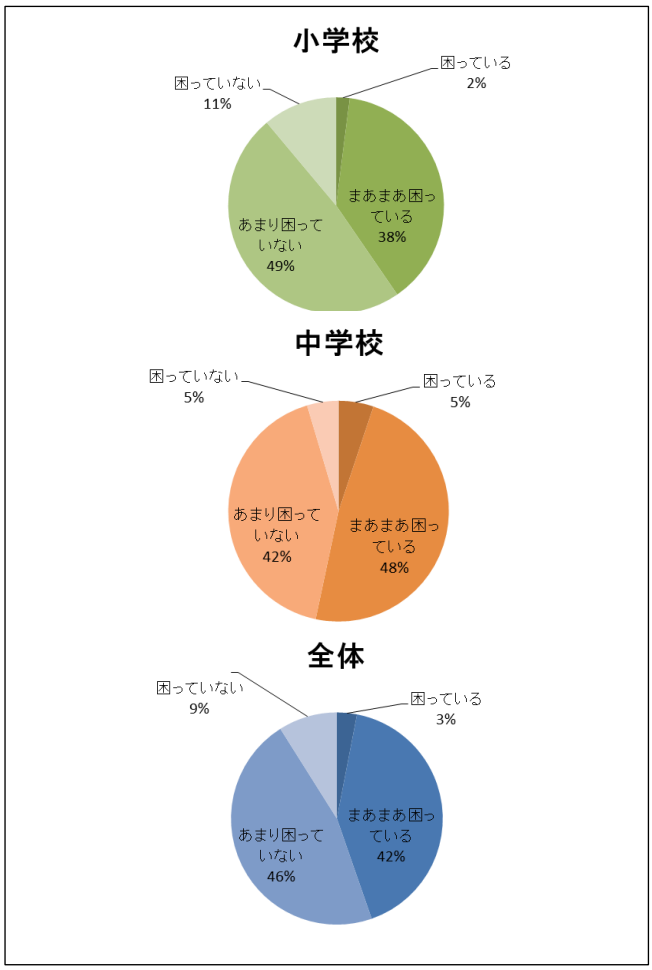


図６　道徳の授業に関する校内研修について

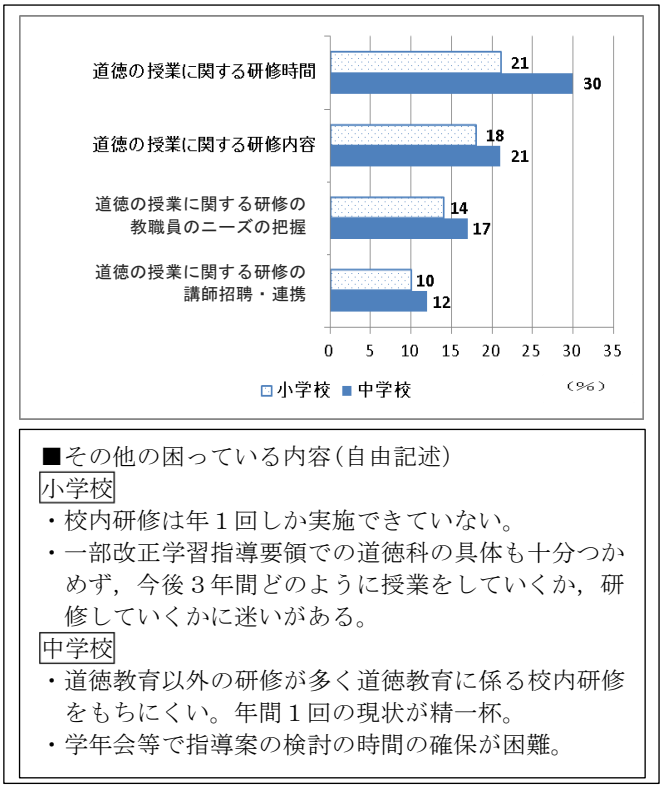


図７　道徳の授業に関する校内研修について困っている内容

道徳の授業に関する校内研修について，図６のように，「困っている」「まあまあ困っている」と回答した学校（全体）は45%であった。校種別にみると，小学校40%，中学校53%と13ポイントの差が見られ，小学校よりも中学校で，道徳の授業に関する校内研修について困っていることが分かった。

その学校が，図７で示しているように，特に課題と感じている内容として最も多かったのは，小学校・中学校ともに「道徳の授業に関する研修時間」であり，小学校21%，中学校30%であった。

次いで，多かったのは「道徳の授業に関する研修内容」で小学校18%，中学校21%であった。

自由記述については，道徳の授業に関する校内研修を確保することに対する難しさを挙げている学校が多かった。

これらのことから，小学校・中学校ともに道徳の授業に関する校内研修について，教職員のニーズを踏まえた研修内容の設定や，そのための研修時間不足に困っていることが分かった。

エ　道徳の授業における各教科等との関連を図る指導について

「各教科等との関連を図る指導について」のアンケート結果を次頁図８及び図９に示す。

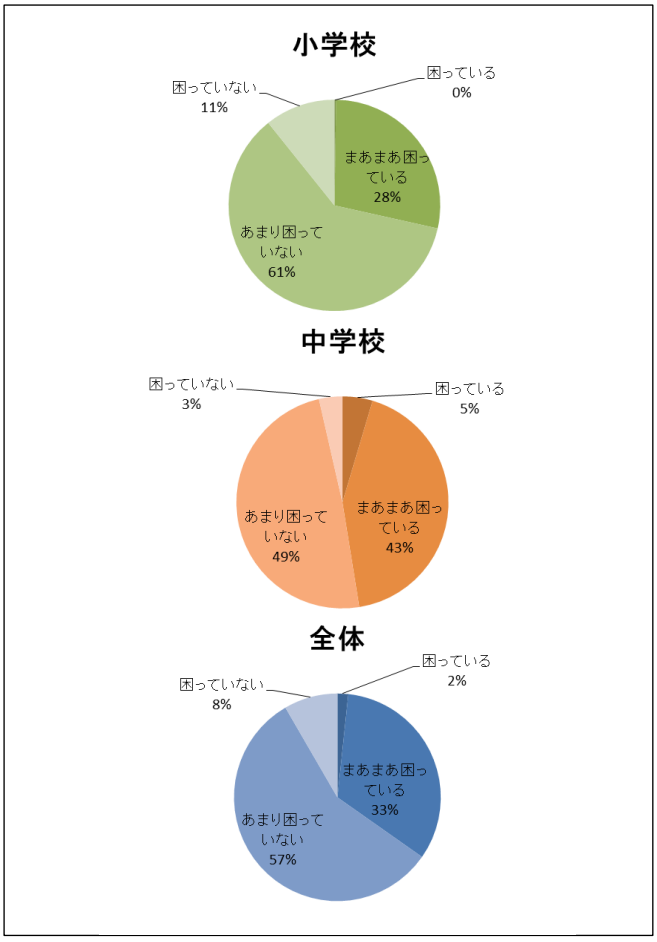


図８　道徳の授業における各教科等との関連を図る指導について

道徳の授業における各教科等との関連を図る指導について，図８のように，「困っている」「まあまあ困っている」と回答した学校（全体）は35％であった。校種別にみると，小学校28％，中学校48％と20ポイントの大きな差が見られる。

その学校が，特に課題と感じている内容は，図９のように「道徳の授業における各教科等の関連を図る指導方法の工夫」で小学校では26％，中学校では36％であった。

自由記述については，「関連を図る効果が分からない」「関連を図る指導方法の工夫についての研修」等を挙げている学校があった。また，中学校においては，「関連を図る上で，他教科担当者との連携」等を挙げていた。

これらのことから，道徳教育の全体計画（別葉）に各教科との関連等が明記されているものの，道徳教育の要となる道徳授業において，具体的にどのように指導方法の工夫を図ることがより効果的なのかが分からないといった，各教科等との関連を図った指導に困っていることが分かる。

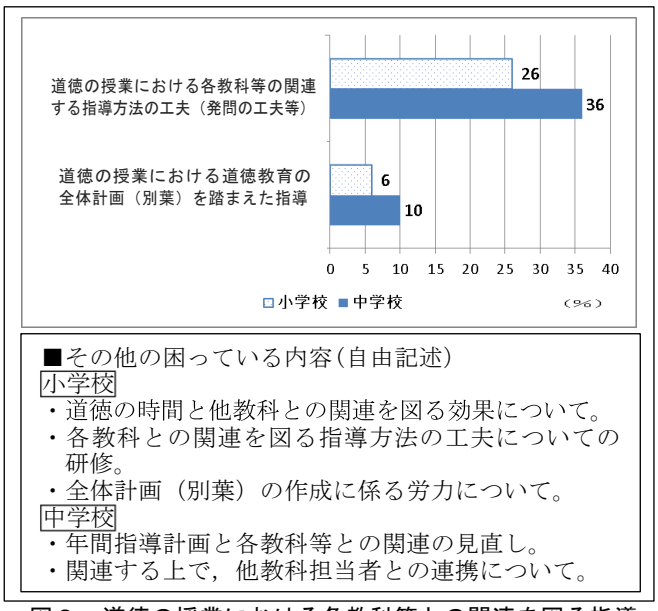


図９　道徳の授業における各教科等との関連を図る指導について困っている内容

オ　道徳の授業に係る年間指導計画の作成とその活用について

「道徳の授業に係る年間指導計画の作成とその活用について」のアンケート結果を図10及び図11に示す。

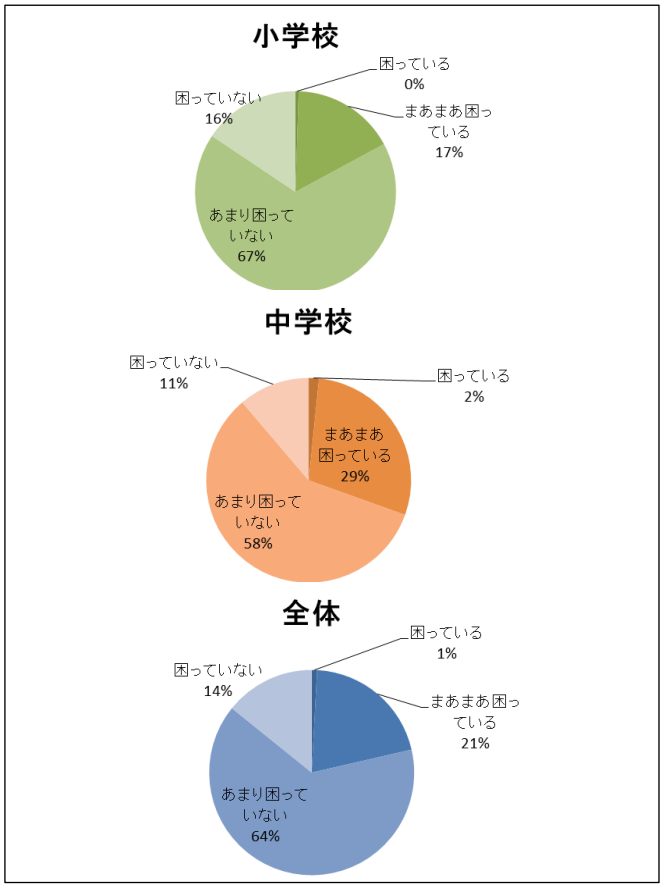


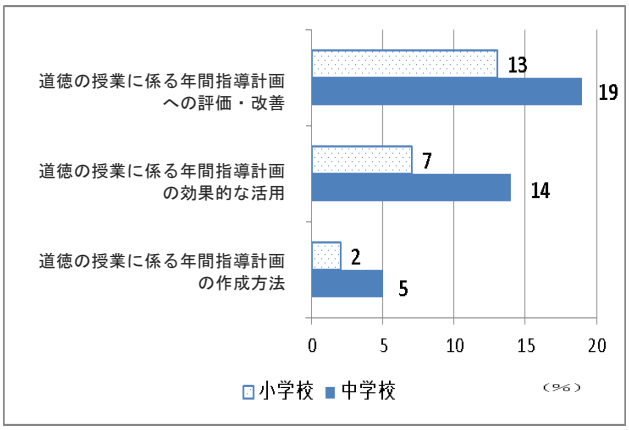
図10　道徳の授業に係る年間指導計画の作成とその活用について

道徳の授業に係る年間指導計画の作成とその活用について，図10のように，「困っている」「まあまあ困っている」と回答した学校（全体）は22%であった。校種別にみると，小学校17%，中学校31%と14ポイントの差が見られる。

それらの学校が，図11で示しているように，特に課題と感じている内容として最も多かったのが，小学校・中学校ともに「道徳の授業に係る年間指導計画への評価・改善」であり，小学校では13%，中学校では19%という結果であった。これは，他の質問項目と比べ，困っている意識は，それほど高くない。

自由記述については，教科化に向けての年間指導計画の改善について，学校の教育活動を反映させた年間指導計画にしていくこと等を挙げている学校が多かった。

これらのことから，作成した道徳の授業に係る年間指導計画を基に，各道徳の授業の実践を図り，内容を改善につないでいく，ということを意識している学校は少ないと考えられる。



■その他の困っている内容(自由記述)

小学校

- 変化に伴い改善が必要となる計画の整合性について。
- 道徳科に向けた年間指導計画の作成について。
- 地域教材と年間指導計画の関連付けにについて。
- 複式学級における年間指導計画の作成について。
- 「私たちの道徳」と他の読み物資料とを組み合わせて計画を作成することについて。

中学校

- 道徳科に向けた年間指導計画の作成について。
- 教科化に向けて改善が必要となるが，様々な計画の整合性について。
- 行事とのリンクについて。

図11　道徳の授業に係る年間指導計画の作成とその活用について困っている内容

カ　道徳の授業の特質を踏まえた指導

「道徳の授業の特質を踏まえた指導について」のアンケート結果を図12及び図13に示す。

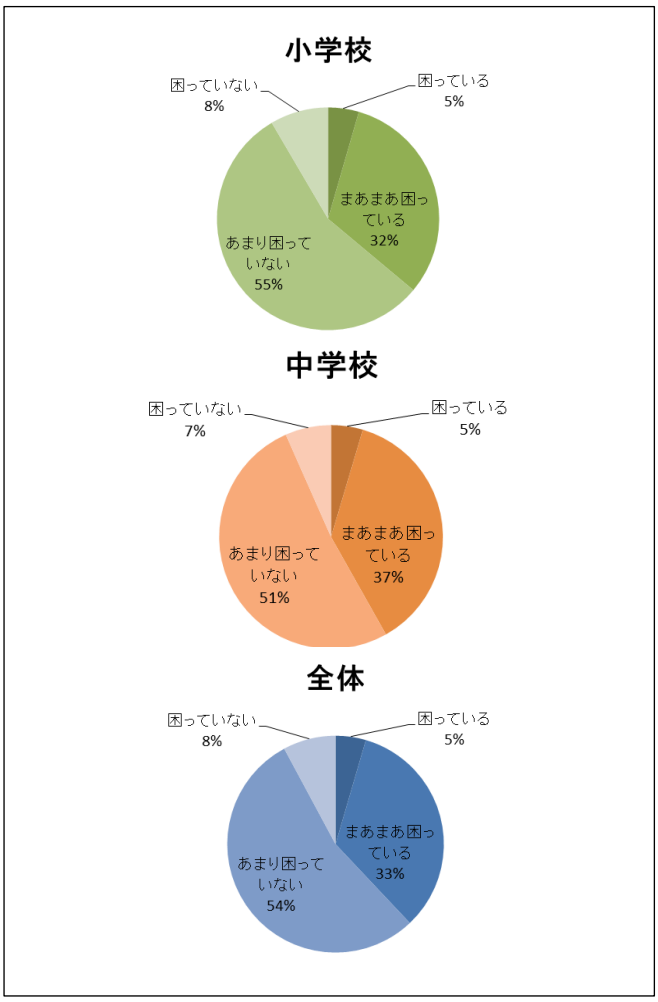


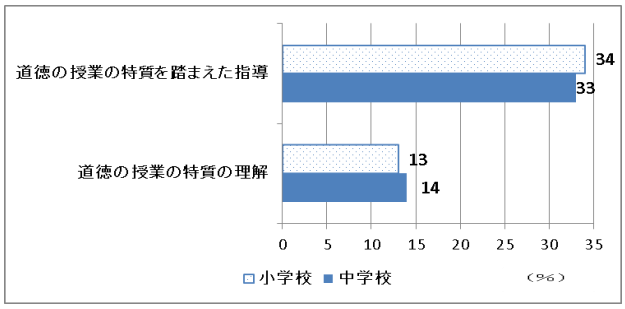
図12　道徳の授業の特質を踏まえた指導について

道徳の授業の特質を踏まえた指導については，図12のように，「困っている」「まあまあ困っている」と回答した学校（全体）は38%であった。校種別にみると，小学校37%，中学校42%と５ポイントの差が見られる。

困っていると回答した学校（全体）が，特に課題と感じている内容は，図13のように小学校・中学校ともに「道徳の授業の特質を踏まえた指導」であり，小学校では34%，中学校では33%であった。

自由記述については，児童の生活にどのように生活に結び付けさせるかが分からないという内容を挙げている学校があった。

これらのことから，道徳の授業における特質の理解は概ねされているものの，それを実際の授業における指導へのつなぎ方に困っている学校があることが分かる。



■その他の困っている内容(自由記述)

小学校

・道徳の授業での学びをどのように児童の生活につないでいくかについて。
・道徳の授業と児童の自己の生き方と結び付けるかについて。
・学んだ道徳的価値をどのように生活へ生かしていけるかについて。

図13　道徳の授業の特質を踏まえた指導について困っている内容

キ　道徳の授業の構想について

「道徳の授業の構想について」のアンケート結果を図14及び図15に示す。

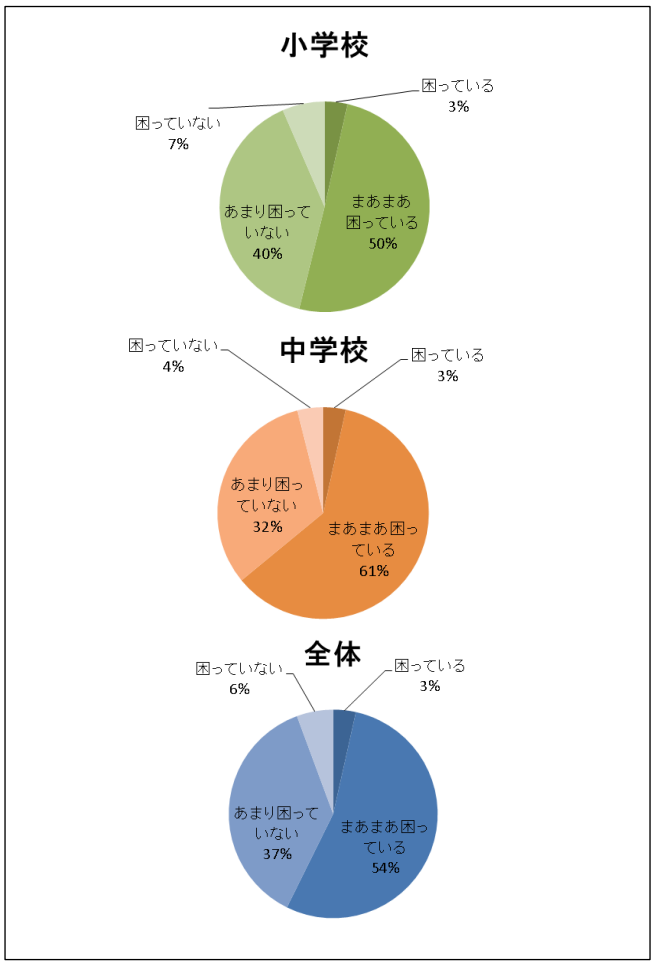
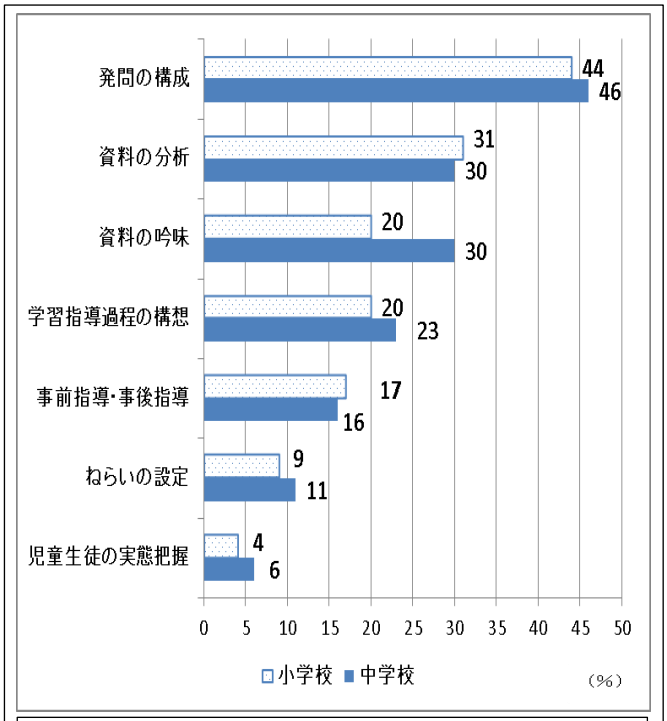


図14　道徳の授業の構想について



■その他の困っている内容(自由記述)

小学校

・生活実態と結び付けて考えさせる発問について。

中学校

・生徒実態を踏まえた読み物資料の選定について。
・主体的な学びとの関連について。

図15　道徳の授業の構想について困っている内容

道徳の授業の構想について，図14のように，「困っている」「まあまあ困っている」と回答した学校（全体）は57%であった。半数以上の学校の多くの学校が，困っている質問項目である。校種別にみると，小学校53%，中学校64%と11ポイントの差が見られる。

それらの学校が，特に困っていると感じている内容は，図15のように小学校・中学校とも「発問の構成」が最も高く，小学校が44%，中学校が46%であった。次に，高かったのは，「資料の分析」であり，小学校が31%，中学校が30%であった。

自由記述については，生活実態と結び付けて考えさせる発問や生徒実態を踏まえた読み物資料の選定について困っていると挙げている学校がいた。

これらのことから，道徳の授業の構想については，授業で読み物資料を活用する際，資料をどのように分析し，それを児童生徒の実態を踏まえ，どう発問を構成していくかについて，困っていることが分かった。

ク　道徳の授業における指導方法について

「道徳の授業の構想について」のアンケート結果を次頁図16及び図17に示す。

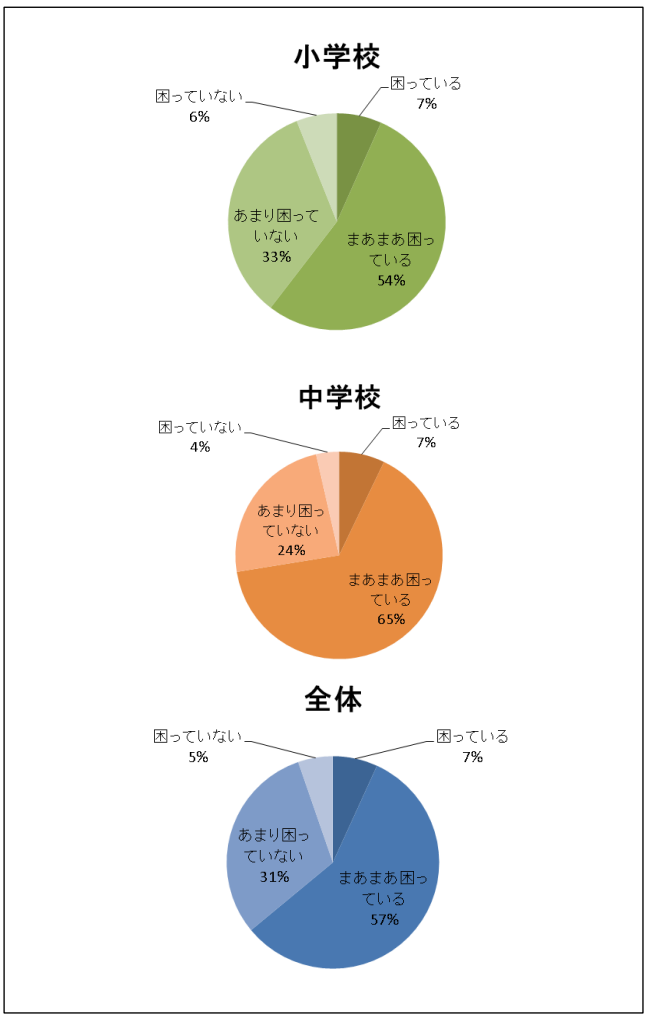
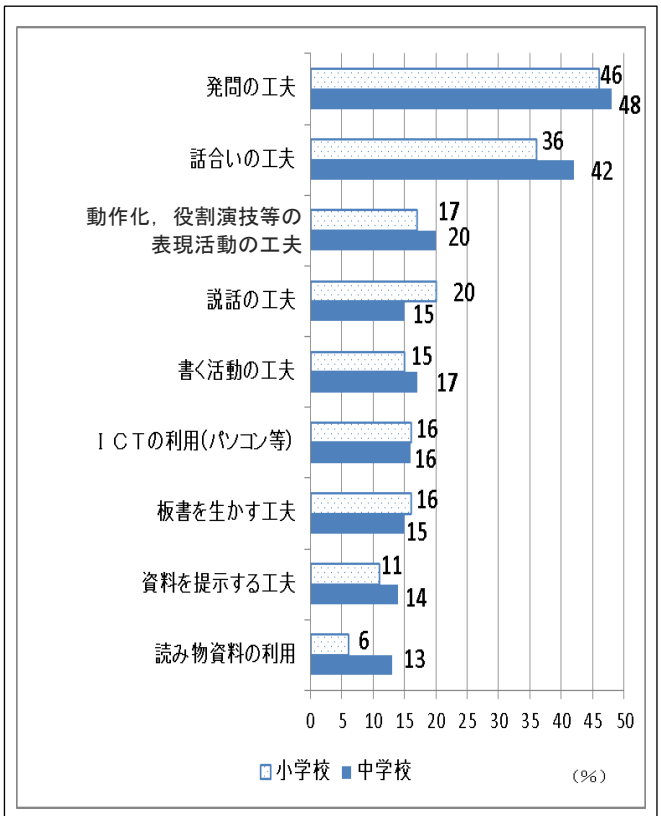


図16　道徳の授業における指導方法について



■その他の困っている内容(自由記述)

小学校

・中心発問の設定について。

中学校

・教師の指導のばらつきについて。
・効果的な対話活動の取り入れ方について。
・VTR 教材以外の ICT 教材の取り入れ方について。

図17　道徳の授業における指導方法について困っている内容

道徳の授業における指導方法について，図16のように，「困っている」「まあまあ困っている」と回答した学校（全体）は64%と，他の質問項目に比べて，非常に高い割合であった。校種別では，小学校61%，中学校72%と11ポイントの差が見られる。

図17に示すように，それらの学校が特に困っている内容は「発問の工夫」について，小学校46%，中学校48%，「話合いの工夫」について，小学校36%中学校42%であった。

自由記述については，中心発問の設定や対話活動の取り入れ方，ＩＣＴ教材の取り入れ方等について困っていることを挙げている学校があった。

これらのことから，道徳の授業における指導方法については，児童生徒がしっかり考えを引き出すための発問の工夫や自分たちの考えを語り合えるような話合いにしていくことに難しさを感じていることが分かった。また，「考え，議論する」道徳科への質的転換を図るための指導方法の改善について困っていることが分かった。

ケ　道徳の授業における家庭や地域社会との連携について

「道徳の授業における家庭や地域社会との連携について」のアンケート結果を図18及び図19に示す。

道徳の授業における家庭や地域社会との連携について，図18のように「困っている」「まあまあ困っている」と回答した学校（全体）は55%であった。校種別では，小学校51%，中学校62%と11ポイントの差が見られる。

図19のように，それらの学校が特に困っている内容は，「地域社会等における人材の把握」について困っている学校は小学校36%，中学校45%であり，「連携する時間の確保」は，小学校では29%，中学校では33%であった。

自由記述については，家庭・地域社会との連携についての年間指導計画に位置付けや，地域教材の扱い，地域社会のゲスト・ティーチャーと教師との思いの違い等を挙げている学校があった。

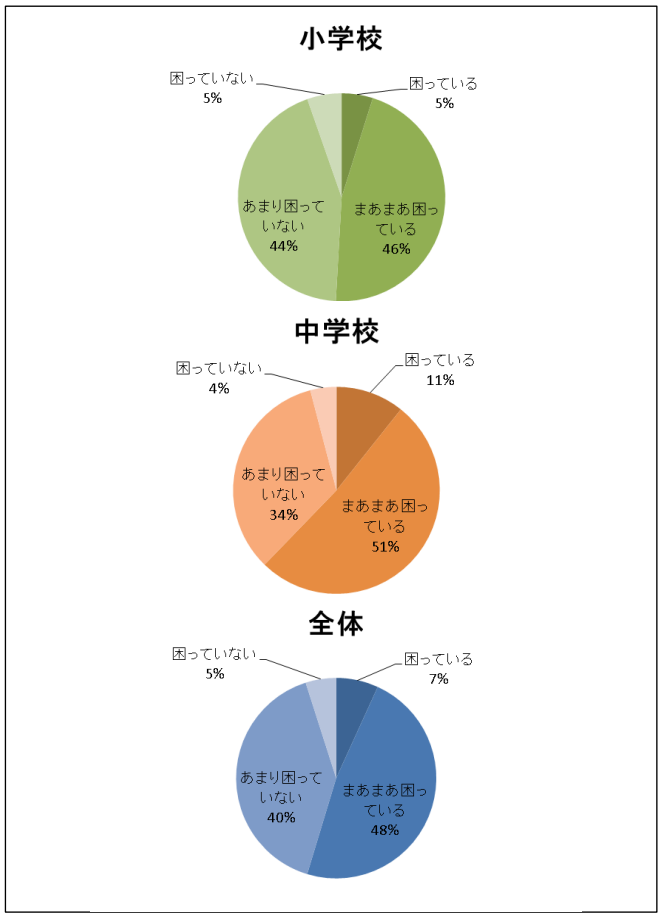
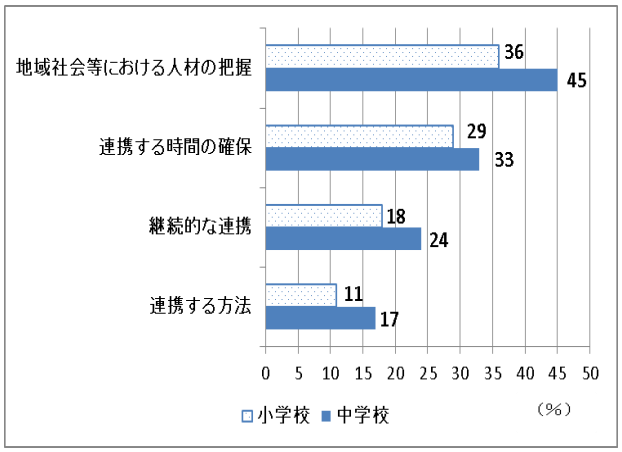


図18　道徳の授業における家庭や地域社会との連携について



■その他の困っている内容

小学校

・効果的な家庭・地域社会との連携について。
・年間指導計画に位置付けについて。
・地域教材の開発やそれに関わる自作資料の作成について。

中学校

・家庭や地域との連携をするという視点や地域教材の発掘の視点を全体に周知していないこと。

図19　道徳の授業における家庭や地域社会との連携について困っている内容

これらのことから，道徳の授業における家庭や地域社会との連携については，学校は地域社会等における連携を図りたいという思いをもっているが，そこに人的な把握等の難しさを感じており，これまで培ったネットワークを生かしながら連携強化していくことが大切であると感じていることが伺える。

コ　道徳の授業における評価について

「道徳の授業における評価について」のアンケート結果を図20及び図21に示す。

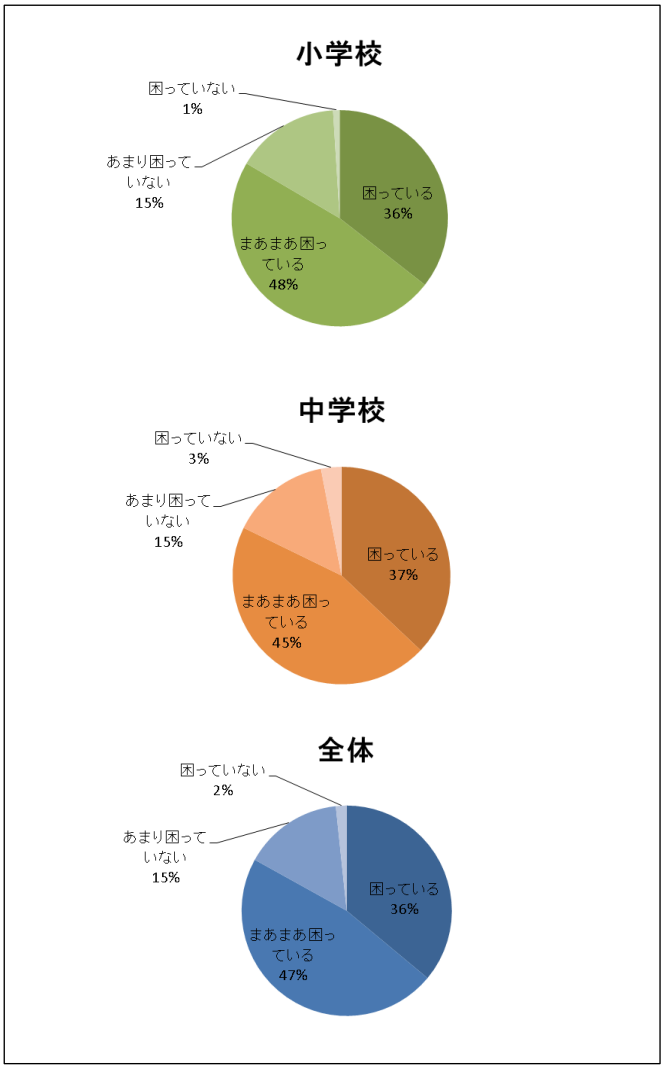
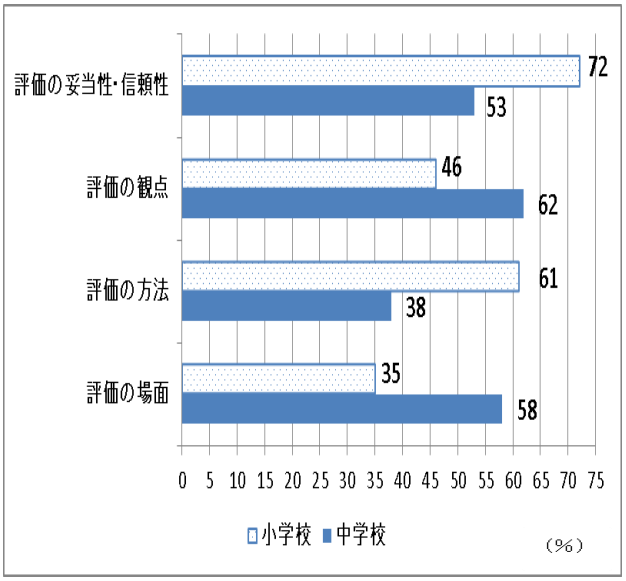


図20　道徳の授業における評価について

道徳の授業における評価について，12 の質問項目の中で，最も高い値となった。図 20 のように，「困っている」「まあまあ困っている」と回答した学校（全体）は83％であった。校種別にみると，小学校84％，中学校82％で，その差は，わずか２ポイントであり，県全体としての大きな共通課題であると捉える。

これらの学校が特に困っていると感じている内容は，図21のように「評価の妥当性・信頼性」について，小学校が72%，中学校が53%であった。また「評価の観点」について，小学校46%，中学校が62%という結果であった。



■その他の困っている内容(自由記述)

小学校

・あゆみへの記述の仕方。
・評価内容を児童や保護者にどのように伝えるのか。
・ポートフォリオのような記録の残し方。

中学校

・評価全般に関して教職員全員の共通認識ができていない。
・評価資料の蓄積方法。

図21　道徳の授業における評価について困っている内容

自由記述については，児童生徒及び保護者への返し方や教職員の共通認識について挙げている学校があった。

これらのことから，道徳の教科化に向けて道徳の授業の評価をどのようにしたらよいのかが分からないという不安感が，困っている意識の高さにつながっていると考えられる。特に，「評価の妥当性・信頼性」「評価の観点」について，困っている学校が多く，評価の具体を知りたいという願いが感じられる。

なお，道徳の授業の評価に係る取組例について自由記述（全133校，小学校91校，中学校42校）として記載したものをまとめたものが，表６及び表７である。表６は小学校の取組例，表７は中学校の取組例である。

表６　小学校における道徳の授業の評価に係る取組例

評価の方法	評価を対象とする場面	評価の観点		評価者
児童の記入した内容(ワークシート，「私たちの道徳，等)	終末の振り返り場面	学習状況	■項目 ①道徳の時間は楽しかったか ②自分なりの考えをもつことが出来たか ③今日考えたことや学んだことを，これからの生活に生かしていこうと思うか ④心に残ったこと・感想	児童による自己評価
			■項目（○△×選択） ○今日の道徳は自分のためになったか ○今日の資料は分かりやすかったか ○じっくり考えることができたか ○今日の道徳で思ったことや考えたこと	
			■項目 本時のねらいに沿い，次の視点で記入させる ○資料との出会い ○新しい自分との出会い ○友達との出会い	
		道徳的価値の自覚の深まり	■項目 ○道徳的価値の自覚の深まりがみられたか ○ねらう道徳的価値に対する気付きがもてたか　等	教師による評価
			■項目 ○児童が内容項目についてどのような考えをもっているか。 ○自分自身を振り返ったり，変容に気付くことができるようにしている。	
	中心発問と終末		■項目 ○道徳的価値についての考えの深まりについて ○自分自身を振り返って考えることができているかについて	
事前事後アンケート	授業前後		児童の道徳的価値の自覚の深まり	
役割演技等	適宜	学習状況	児童の活動の様子	
話合い活動			児童の話合いの様子	
挙手回数及び発表回数				
面談	道徳の授業1週間後	道徳的価値の自覚の深まり	■項目 ○児童が道徳的価値についてどう捉えているか ○授業後，考えたことについて ○授業後，実行したことがあるか　等	

表７　中学校における道徳の授業の評価に係る取組例

評価の方法	評価を対象とする場面	評価の観点		評価者
生徒の記入した内容(ワークシート等)	終末の振り返り場面	学習状況	■項目 「ためになった」「本気で考えた」の２項目について４段階で自己評価させる	生徒による自己評価
	適宜	道徳的価値の自覚の深まり	ICEルーブリックを取り入れた評価を行っている	生徒による自己評価 教師による評価
	適宜		授業のねらいに迫っているか，という視点での見取り	教師による評価
	授業前後		授業前後の変容の見取り	
生徒の発言内容	授業中と授業後		ねらいとする道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚が深まっているか，という視点での見取り	
話合い活動	適宜	学習状況	生徒の話合いの様子	
授業態度				

評価の方法としては，児童生徒の記入した内容が最も多かった。その他に，児童生徒の発言内容，話合い活動が，小学校・中学校に共通のものであった。また，アンケート，役割演技等，挙手回数及び発表回数，面談が挙げられていた。

次に，評価の対象となる場面としては，小学校・中学校ともに，終末の振り返りの場面，中心発問の場面が多かった。授業中，適宜評価していくという回答もあった。

さらに，評価の観点及び評価者については，大きく三つの観点で評価していることが分かった。

①道徳的価値の自覚の深まりについての教師による見取り
②児童生徒の学習状況についての教師の見取り
③児童生徒自身による学習状況についての振り返り等

アンケート結果からの課題としては，「（評価については）現在はまだ検討中である。」「（評価については）これからの検討課題である。」と記入している学校があり，道徳の授業の評価に対する意識の低さが見受けられた。これは，これまでの全体的な共通の傾向であったと考えられる。道徳科へ向かっている現在，広島県の公立小学校・中学校は，評価についての問題意識が高まっていると考えられる。

以上のことから，各質問の結果をまとめると，広島県の小学校・中学校が道徳の授業において，特に困っていることは，資料の分析や発問の構成等の授業構想，発問や話合い等の指導方法の工夫，さらに，「評価の妥当性・信頼性」があるものにしていくための「評価の観点」「評価の方法」「評価の場面」であることが分かった。

(3) 「指導」と「評価」の視点の分析及び考察

広島県の公立小学校・中学校が道徳の授業において，困っていると感じている上位三項目には，連関性があるのだろうか。「指導」と「評価」の連関性を調べるために，χ^2 検定を行った結果を，表８及び表９に示す。

道徳の授業における「指導（授業の構想・指導方法）」と「評価」について困っているという意識には，有意差が認められた。「指導」に困っている学校の方が，「評価」に困っていると解釈することができる。つまり，「指導」と「評価」について困っていると感じている意識には，連関性があることが分かった。

以上の調査結果をまとめると次のようになる。

表８　道徳の授業の「指導」と「評価」について（小学校）

問10 道徳の授業における評価について	問７　道徳の授業の構想について		
	困っていない	困っている	χ２検定
困っていない	54校(13%)	16校(4%)	***
困っている	138校 (33%)	203校(50%)	
	問８　道徳の授業における指導方法について		
	困っていない	困っている	χ２検定
困っていない	51校(12%)	19校(5%)	***
困っている	119校(29%)	222校(54%)	

n=411校　　*** p＜.001

表９　道徳の授業の「指導」と「評価」について（中学校）

問10 道徳の授業における評価について	問７　道徳の授業の構想について		
	困っていない	困っている	χ２検定
困っていない	24校(12%)	12校(６%)	***
困っている	44校(22%)	117校(60%)	
	問８　道徳の授業における指導方法について		
	困っていない	困っている	χ２検定
困っていない	20校(10%)	16校(８%)	***
困っている	35校(18%)	126校(64%)	

n=197校　　*** p＜.001

・本県の公立小学校・中学校において困っていると感じている上位三項目は，「評価」「指導方法」「授業の構想」である。
・中でも，「評価」について，最も困っていると感じている。
・「指導」及び「評価」について，困っていると感じている意識には，連関性がある。

上位三項目において，約３割程度以上の学校が困っている内容は，次の２点である。

・「評価」については，「評価の妥当性・信頼性」「評価の観点」「評価の方法」「評価の場面」である。
・「指導」については，「発問の工夫」「話合いの工夫」「発問の構成」「資料の分析」である。

困っている内容に関して，次のような自由記述があった。

「評価」についての自由記述
●「評価の妥当性・信頼性」について
・評価が主観的になってしまいがちで，客観性のある評価とはどのようにすればよいのかが分からない。

・前向きな言葉にどれだけの信憑性や妥当性があるのかも，教師の主観での評価になる恐れがあるのではないかと感じている。

●「評価の観点」「評価の方法」「評価の場面」について

・どのような観点と方法で，どのように表現し，本人や保護者にどのように提示するのかが難しい。

・児童の変容をどのように捉え，評価していくかが難しい。

・評価をどの時点ですべきか迷う。話合いで分かっていても，行動を伴わない場合，よい評価にしてもよいのだろうか。

・児童の道徳性がどのように高まり伸長したのかを見取る方法や視点について。

・他教科と違って道徳は児童の実態が大きく関わるので，いつでもどのクラスでも同じ評価方法・評価内容で評価することは難しい。

●「指導」と「評価」について

・道徳の授業におけるねらいの設定に対して，個々の生徒の感じ方及びその表現をどう評価するのかが難しい。

・道徳の内容項目の分析と把握が不十分なところもあり，ねらいの設定が甘くなったり，ねらいに沿った指導にならなかったりする中で，評価が妥当であるかどうかについて分からない。

・本校の実態を踏まえ，道徳の各授業のねらいを明確にし，生徒の変容を見取る評価をどの担任でもできるように準備を進める必要がある。

●児童生徒の内面を見取ることの難しさについて

・道徳の授業で評価を行うことになると，生徒がどう答えたら正解かを考えてしまい本音を引き出せなくなり，論議に深まりがなくなるのではないか。

・他教科と違って，道徳では，生徒たちの前向きな思考や変容について何をどのように評価すればよいのかの判断が難しい。

・行動ではなく心情を育てていく際に，目に見えないものをどのように評価すればよいかがまだ分からない。

・ワークシートや発言で評価すると，国語力のある児童によい評価がつきやすいのではないという懸念がある。

●「評価」に対する不安

・これまでは，通知票や指導要録などに特に取り上げて記入することがなく，担任に任されていたが，今後，どのように評価し，記述していくかということや，評価を生徒へ提示する方法など，どのように教員全体で共通理解していくのかなどが課題である。

「指導」についての自由記述

●「発問全般」について

・授業構想に関わって，資料の解釈とどのような発問をするのがよいかが分からない。

・主発問を中心に発問の構成が十分吟味できておらず，ねらいとする道徳的価値に高めることができていない時がある。

・道徳的価値を深めるための発問が十分できていない。

・ねらいに迫るための発問のつなげ方や切り返し方が分からない。

・道徳的価値についてより深く考えさせるための発問について，研修を行う必要があると感じる。

・子供の考えを本当に深めることができる発問を練り切れていない。

・何を中心発問とするのか，また，発問と発問をどうつなぐのか教師が迷っている状態である。

・導入の工夫や，ねらいに迫るための中心発問を何にすればよいか等，道徳の授業をいかに効果的に構成するかが大きな課題である。

・児童が自分自身のこととして考えるような，効果的な発問の工夫が十分とは言えない。

●「話合いの工夫」について

・児童が主体的に関わり合って，自分の意見を話したり，友だちの意見を聞いたりして，深く考えるための話合いのもち方がマンネリ化している。

・児童と児童がつながり合い主体的に参加する話合いの仕方について模索している

・子供たち同士の対話により，道徳的価値の自覚を高めること。

・資料を通して学んだことを自分の生活に結び付けて考えさせることに難しさを感じている。

・少人数のため，話合い等を生かした授業が成立しにくい。

・ねらいとする道徳的価値に迫れるような，話合い活動になりにくい。

・話合い活動やグループ活動を毎時間取り入れた学習指導案を工夫しているが，学級の実態によって難しいこともある。

●「資料の分析」について

・道徳授業における事前指導,資料や発問を吟味することに課題があるため。

・授業の構成については，発問の精選や資料の分析等との関連しており，今後も学ぶべきことが多くある。

・資料分析や発問の吟味が甘く，道徳の時間としてのねらいの達成が不十分である。その結果，生徒の道徳の時間に対する肯定的な受け止めの向上が図られていない。生徒の実態に応じた資料を選定し，さらにその資料分析や指導案検討を行う十分な時間の確保が難しい。

これらの自由記述を「評価」及び「指導」別にまとめると，次のようになる。

●「評価」について
・道徳性に係る「評価の観点」「評価の方法」「評価の場面」の設定が分からない。
・「評価」が教師の主観になるのではないかという不安がある。
・「指導」と「評価」を一体化することに対する難しさを感じている。
・児童生徒の内面を見取ることに難しさを感じている。
・道徳の授業の評価全般に対して不安を感じている。

●「指導」について
・ねらいに迫るための発問（特に，中心発問）について困っている。
・児童生徒が主体的に関わり合い，ねらいとする道徳的価値へと向かって深く考え，話し合わせることが難しい。
・ねらいに迫るための資料の分析に困っている。

以上のことから，「考え，議論する」道徳科への質的転換を図るためには，「指導」と「評価」の一体化を図ることが重要であることが分かった。このことは，教員研修センターの平成27年度道徳教育指導者養成研修（中央指導者研修）の「研修のしおり」に示されている「道徳の時間の指導の結果を明らかにして，指導の改善を図れるようにする仕組（評価）をつくれば，指導が充実するのではないか」という国としての課題と重なるものであると考える。

Ⅳ　本県の道徳の授業の現状と課題を踏まえ「考え，議論する」道徳科への質的転換に向けて

１　本県の道徳の授業の課題解決に向けて

本県の道徳の授業を「考え，議論する」道徳科へと質的転換させるために，本県の現状と課題を踏まえ，次の３点をポイントが必要であると考える。

■ポイント①

「指導」と「評価」の一体化を図る工夫を行うこと。
・教師に１単位時間を貫くキーワードとしてねらいを意識化させること。

■ポイント②

児童生徒が「考え，議論する」ための指導を明確にすること。
・児童生徒に考えさせる中心的な場面と中心発問を明確にする資料の分析。
・道徳的な課題について児童生徒が自分ならどのように捉えるかを考えさせる発問の工夫。
・自分とは異なる意見や見方と出会って，自分の考えを深め，よりよい考えをつくっていこうとする話合いの工夫。

■ポイント③

「考え，議論する」ことの評価を明確にすること。
・ねらいに基づく「評価の観点」「評価の方法」「評価の場面」の設定。

２　「道徳リードシート（試案）」について

本研究においては，前述のように「考え，議論する」道徳科への質的転換を図るための方策として，道徳の授業の指導を行う際に教師が活用する「道徳リードシート」を二年次に開発することを目指す。本年度は，その基となる試案を作成し，小学校・中学校の道徳の授業において活用を図り，成果及び改善点を明確にする。

(1) 作成の基本的な考え方

本年度は，前述の三つのポイントの中のポイント①に重点をおいて，試案を作成する。なお，現段階（平成28年３月８日現在）では，「評価」については，「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」において審議中であるため，学習指導要領に示されている「学習状況」の評価を行う視点のみに留めておく。

横山利弘（2007）は，読み物教材について，中心発問を軸とした骨格のあるしっかりとした道徳の授業をするためには，授業準備の段階において「何を教えるのか」ということを念頭において考えるよりも，「何を考えさせるのか」ということに比重をおいて検討することが肝要であると述べている。また，道徳の授業においては，道徳の資料を読み込んで「考えさせる」山を見いだすという事前準備は，不可欠であるとも述べている。

これらを受け，試案は，読み物教材の登場人物の心情と自分との関わりを通して，道徳的価値の理

解を深めることを中心とする授業において活用するものとし，「ねらいを基に，児童生徒に考えさせる中心発問を明確にし，教師が何を評価するのかが明確になるリードシート」を作成する。

(2) 二つの試案について

教師がアレンジして活用できる試案として，二つの試案を提案する。

次に，各試案について説明する。

ア　試案①の作成上のポイント

授業の構想から評価まで，スモールステップで活用できるものとして作成した。図22のように，資料の分析と学習指導過程，評価という大きく三つの枠で構成した。

図22　道徳リードシート（試案①）

○　ポイント①について

「指導」と「評価」の一体化を図る工夫を行うこと。

・児童生徒の実態を踏まえて設定したねらいが意識化できるような構造にした。

○　ポイント②について

児童生徒が「考え，議論する」ための指導を明確にすること。

・資料の分析の欄には，何を考えさせるのかが明確になるように，中心発問が導き出せるものとした。

○　ポイント③について

「考え，議論する」ことの評価を明確にすること。

・評価の欄には，評価の観点・評価の場面等の具体例から選択して，評価ができるものにした。

なお，資料の分析の流れは京都府教育委員会「道徳教育の進め方　京都式ハンドブック」（平成25年）を参考に作成した。本ハンドブックによると，読み物資料を吟味する時のポイントは，資料に描かれている道徳的価値とその論点の展開を次の(ｱ)～(ｴ)の流れで行い，明確に捉えることであるとしている。

(ｱ) 生き方が道徳的に変化したのは，だれですか。何ですか。

(ｲ) 主人公の言動や心情はどこで変化していますか。

(ｳ) 主人公が変化したきっかけは何ですか。

(ｴ) 主人公は，自覚した結果どのような行為をしましたか？

この考えを基に，試案①では次の流れで，資料の分析をすることとした。

(ｱ) 道徳的に変容した登場人物は，誰か。（A）

(ｲ)（A）が変容するきっかけになった出来事は，何か。（B）

(ｳ)（A）が変容を遂げたのは，どこか。（C）

(ｴ)（C）を中心発問として構成しましょう。

■　ねらいの明確化

記入例：（B）をきっかけに（C）した（A）の気持ちを考えることを通して，（D）の大切さに気付かせ，（E）しようとする（F）を育てる。

イ　試案②の作成上のポイント

図23のように，授業の構想から評価まで，ポイントを絞って活用できるものとして作成した。児童生徒の実態や教師の願いを踏まえ，資料の特質をおさえつつ，ねらいを検討し，児童生徒の意識の流れに沿った一貫性のある展開となるよう構成した。

○　ポイント①について

「指導」と「評価」の一体化を図る工夫を行うこと。

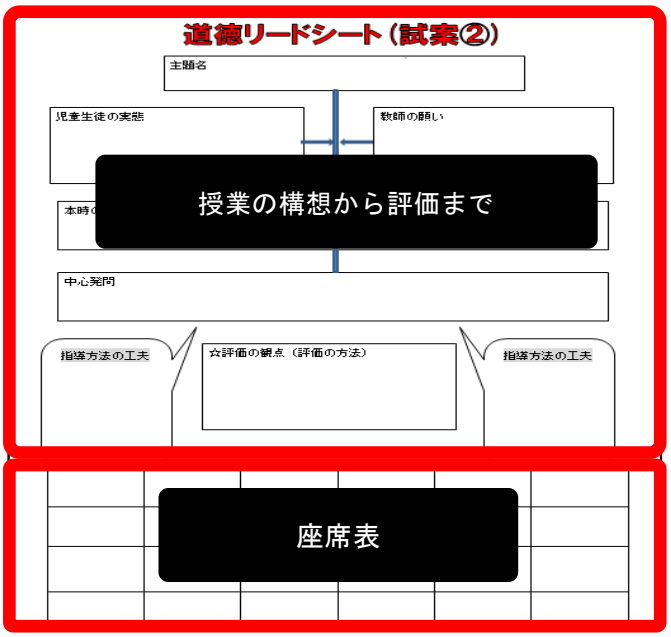


図23　「道徳リードシート（試案②）」

・本時のねらいを１時間の授業の軸として貫く構造とした。

○　ポイント②について

児童生徒が「考え，議論する」ための指導を明確にすること。

・本時のねらいを基に，何を考えさせたいのかが明確になるように，中心発問が導き出せるものとした。

○　ポイント③について

「考え，議論する」ことの評価を明確にすること。

・「考え，議論する」内容について評価の観点等を記入することができるものにした。

なお，試案②の様式は，平成27年度広島県教育資料の道徳の時間の構想を参考にして作成した。

(3)　試案の活用を図った実践事例

試案①及び②を活用した実践事例を次に紹介する。

ア　試案①の活用について

(ｱ) 小学校の実践事例

ａ　授業の概要

○　学校名　東広島市立寺西小学校

○　日　時　平成27年12月７日（金）第４校時

○　学　年　第３学年

○　主題名　節度ある生活　１－（１）

○　ねらい

タイマーがピピッと鳴ったことをきっかけに，お母さんに褒められて，「うん…。」と下を向いて，ぽつりと答えたあつしの気持ちを考えることを通して，自らよく考えて行動することの大切さに気付き，節度ある生活をしようとする態度を育てる。

○　資料名　「少しだけなら」出典「わたしたちの道徳　中学年」（文部科学省）

ｂ　試案①を活用した教師の感想

○　ポイント②について

・資料の分析の欄でねらい等を明確にすることができた。

○　ポイント③について

・今までの評価では，評価の観点を決めていても教師の主観が入り，ねらいに沿った流れにならないことがあったが，シートを拠り所にして授業をすれば，教師がねらいに沿って授業を行うことができると感じた。また，評価場面も明らかになっていたので，机間指導の際に，評価をすることができた。

ｃ　試案①の活用に係る成果と課題について

○　ポイント①について

・試案の様式に則って資料の分析を行い，評価まで，見通しをもって授業構想を明確にすることができた。

・終末における説話の内容が，ねらいとする道徳的価値と一貫したものにならない面が生じた。

○　ポイント②について

・適切な資料の分析をし，児童の多面的・多角的な考えを引き出すための中心発問を設定することができた。

(ｲ) 中学校の実践事例

ａ　授業の概要

○　学校名　東広島市立中央中学校

○　日　時　平成27年12月３日（木）第３校時

○　学　級　第２学年４組

○　主題名　寛容の心　２－（５）

○　ねらい

加奈子が発見した「すごいこと」について話し合うことを通して，いろいろなものの見方や考えがあることに気付き，寛容の心をもとうとする態度を育てる。

○　資料名　「言葉の向こうに」　出典「私たちの道徳　中学校」（文部科学省）

ｂ　試案①を活用した教師の感想

○　ポイント①について

・授業を貫くねらいを明確にしやすかった。

○　ポイント②について

・資料の分析を試案の順序どおりに進めていけばよかったので，非常に分かりやすかった。

・目指すものに対しての発問や，切り返し発問などが不十分であったため，生徒の意見や考えを引き出すことができなかった。もっと深いところまで，考えさせることができたらよかった。

○　ポイント③について

・「評価の観点」「生徒の学習を具体的な姿で表したもの」等の目指すものが分かりやすく，考えやすかった。

ｃ　試案①の活用に係る成果と課題について

○　ポイント②について

・本授業は，「考える道徳」となるような授業構想であった。中心発問において，ワークシートに記入した自分の考えを基に，班でそれぞれの考えを聴き合い，自分と同じ意見や自

分にはない視点の考えに触れ，それをワークシートに記入したり，班で交流したりした。その結果，１時間の授業で感じたことや考えたことを振り返った際，生徒のワークシートには図24のような記述が見られた。自分の考えを基にしっかりと小グループ全員で話し合い，話し合った内容を全体で交流する時間を確保したことで，いろいろなものの見方や考え方に気付くことができた。試案①を拠り所に授業を進めた効果であると考える。

・授業に向けて資料の分析を丁寧に行うことができ，ねらいと中心発問をフィードバックさせながら，時間配分や発問の精選を行うことができた。

・読み物教材を中心とする授業以外における活用が難しかった。

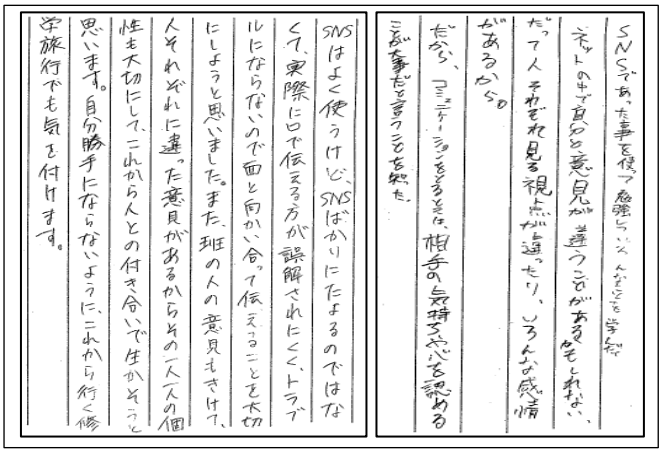


図24　中央中学校の生徒が記入したワークシート

イ　試案②の活用について

(7) 中学校の実践事例

a　授業の概要

○　学校名　東広島市立西条中学校

○　日　時　平成 27 年 12 月 7 日（金）第２校時

○　学　級　第１学年１組

○　主題名　誠実に行動し，責任をもつ　１－（３）

○　ねらい

敏和のツッコミに笑えなかった僕のことを考えることを通して，誠実に行動し，その結果に責任をもとうとする態度を育てる。

○　資料名　「ネット将棋」　出典「私たちの道徳中学校」（文部科学省）

b　試案②を活用した教師の感想

○　ポイント①について

・クラスの実態や課題，本時のねらい等を記入することによって，評価の観点や方法，場面が明確になった。

○　ポイント③について

・座席表は，評価の観点に照らし合わせながら見取りが出来た。

・改善案として，評価に絞った試案も考えられると感じた。例えば，「中心発問」の欄の下に，「評価の対象となる発問」という欄を設け，評価を意識した発問構成にしていくことも考えられる。

c　試案②の活用に係る成果と課題について

○　ポイント①について

・教師が常にねらいを意識することができた。その結果，図25のようなワークシートの記述内容や発言内容について視点をもって把握することができ，意図的な指名につなぐことができた。

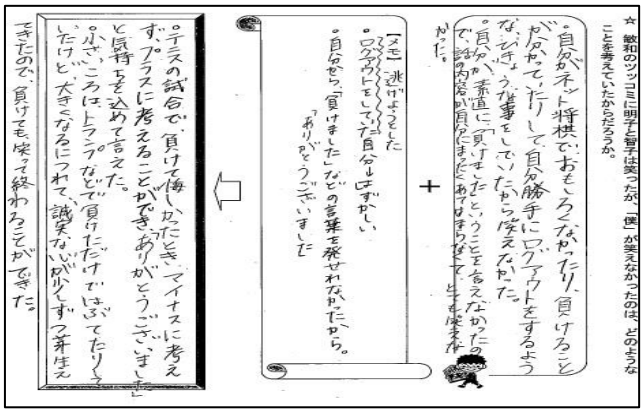


図25 西条中学校の生徒が記入したワークシート

○　ポイント①②について

・教師にとっては本時のねらいが達成できているかを把握する評価の観点を意識することで主題に係る生徒の実態や教師の願いを連動させ，中心発問を設定することができ，生徒の学習状況の把握につながった。

○　ポイント③について

・道徳リードシート下部の座席には，あらかじめ学級の配席に基づいた生徒名を記載しておき，机間指導での見取りや発言内容の記録として活用した。

○　ポイント①③について

・活用方法の認識に差が生じる可能性がある。

(4) 試案の活用に係る成果及び改善点について

３名の研究協力員の実践から，試案の活用には，次の成果があると考える。

○　ポイント①について

・主題を基に，児童生徒に何を考えさせ，教師が何を評価するのかを意識することができた。

○　ポイント②について

・児童生徒に考えさせる中心的な場面と中心発問を明確にする資料の分析をすることができた。

○　ポイント③について

・試案①は，学習状況における評価の観点及び評価の場面を明確にすることができた。

・試案②は，ねらいを基にした評価を行うことができた。

今回の試案は，ポイント①に重点をおいて作成したため，教師の指導と評価の一体化を図ることにつながった。来年度は，児童生徒に何を考えさせ，何を議論させるのかが明確になるよう，ポイント②③を反映させた「道徳リードシート」へと改善していく。

Ⅴ　成果及び二年次への取組

本研究では，広島県内の公立小学校・中学校を対象として行った道徳教育実態調査を通して，道徳の授業等において，教師が困っていると感じていることを明らかにすることができた。また，この課題解決を図る方策として，二年次の研究につながる２種類の「道徳リードシート（試案）」を作成し，活用することができた。

来年度は，試案に係る課題を「道徳リードシート」の改善へとつなげ，その効果を検証していく。

おわりに

本研究において御指導・御助言を与えていただいた兵庫教育大学大学院谷田増幸教授をはじめ，研究協力員の長谷川教諭，鈴木教諭，吉野教諭，アンケートに御協力いただいた広島県公立小学校，中学校の皆様，そして，広島県各教育事務所・芸北支所，各市町教育委員会の皆様，広島市教育委員会，福山市教育委員会の皆様に心から感謝申し上げる。

【注】

(1) 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領解説道徳編』東洋館出版社p. 24・29，『中学校学習指導要領解説道徳編』東洋館出版社p. 25・30，文部科学省（平成27年）：『小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編』p. 13及び文部科学省（平成27年）：『中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編』p. 15を基に稿者が作成した。

(2) 同上p. 37，同上p. 35，同上p. 21及び同上p. 20を基に稿者が作成した。

(3) 同上pp. 144-145，同上pp. 150-151，同上pp. 24-25及び同上pp. 23-24を基に稿者が作成した。

(4) 同上p. 125，同上p. 129，同上p. 104及び同上p. 107を基に稿者が作成した。

【引用文献】

1)　中央教育審議会（平成26年）：『道徳教育の充実に向けた改善方策（答申）』 p. 1

2)　谷田増幸（平成 27 年）：「『特別の教科　道徳』の特質」『中等教育資料６月号』学事出版 pp. 26-31

3)　文部科学省（平成27年）：『小学校学習指導要領解説特別の教科　道徳編』 p. 106

4)　文部科学省（平成27年）：『中学校学習指導要領解説特別の教科　道徳編』 p. 108

【参考文献】

谷田増幸（2015）：「『特別の教科　道徳』における指導と評価の在り方」『教育展望（第61巻第11号）』教育調査研究所

谷田増幸（2011）：「評価の視点からみた道徳教育推進上の課題と今後の展望」『道徳と教育 No. 329』日本道徳教育学会

谷田増幸（2009）：「新学習指導要領とこれからの道徳教育－中学校における改善/充実の視点を中心に－」『道徳と教育　特集　学習指導要領の改訂と道徳教育の課題 No. 327』日本道徳教育学会

柳沼良太（2015）：「道徳の評価を考える」『道徳の時代がきた！』教育出版

西野真由美（2015）：「グローバル時代の道徳授業を考える」『道徳の時間がきた！』教育出版

横山利弘（2007）：『道徳をどう説く　道徳教育，画餅からの脱却』暁教育図書

文部科学省（平成27年）：「教育課程企画特別部会　論点整理」

文部科学省（平成27年）：『小学校学習指導要領解説特別の教科　道徳編』

文部科学省（平成27年）：『中学校学習指導要領解説特別の教科　道徳編』

文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領解説道徳編』東洋館出版社

文部科学省（平成20年）：『中学校学習指導要領解説道徳編』東洋館出版社

中央教育審議会（平成26年10月）：「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」

文部科学省(平成27年)：「『特別の教科　道徳』の指導方法・評価等について（整理案）」『道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議（第７回）』
文部科学省（平成26年）：『わたしたちの道徳　小学校３・４年』
文部科学省（平成26年）：『私たちの道徳　中学校』
文部科学省（平成26年）：『「私たちの道徳」小学校　活用のための指導資料』
文部科学省（平成26年）：『「私たちの道徳」中学校　活用のための指導資料』

道徳の授業等に関して教師が課題と感じていることについてのアンケート

このアンケートは，広島県内の各小・中学校が，平成27年9月の段階で，道徳の授業に関して課題と感じていることを把握するためのものです。
調査結果については，集計データを活用するため，各学校の結果を公表することはありません。
各学校の道徳教育の推進を主に担当する教師（道徳教育推進教師）が，所属校の道徳の授業に関する課題を把握した上で，下記の質問項目について，順番に御回答ください。回答は，黄色の網掛け部に記入してください。

学校名 （記入例）○○市立○○○学校		
学校規模 （H27.5.1） ■該当する欄に「1」の数字を付けてください。	小学校（学級数　5学級以下）	
	小学校（学級数　6～11学級）	
	小学校（学級数　12～18学級）	
	小学校（学級数　19～30学級）	
	小学校（学級数　31学級以上）	
	中学校（2学級以下）	
	中学校（3～11学級）	
	中学校（学級数　12～18学級）	
	中学校（学級数　19～30学級）	
	中学校（学級数　31学級以上）	

アンケート項目

			4 困っている	3 まあまあ困っている	2 あまり困っていない	1 困っていない
問1	①　自校の道徳教育に係る重点目標を踏まえた指導について，右の該当する欄に「1」の数字を付けてください。					
	②　上記①の4，3に「1」を付けた場合は，次のア～エのうち，特に課題と感じている内容に「1」の数字を付けてください。（複数回答可）					
	ア	自校の重点目標を踏まえた指導方法				
	イ	自校の重点目標を踏まえた指導内容				
	ウ	自校の重点目標を踏まえた指導の在り方				
	エ	自校の重点目標の設定				
	■その他，困っている内容があれば，記入してください。					
問2	①　道徳教育の全体計画を意識した指導について，右の該当する欄に「1」の数字を付けてください。					
	②　上記①の4，3に「1」を付けた場合は，次のア～エのうち，特に課題と感じている内容に「1」の数字を付けてください。（複数回答可）					
	ア	全教師の主体的な参画				
	イ	全体計画を基にした道徳教育の実施				
	ウ	全体計画の評価・改善のための体制				
	エ	全教師の共通理解を図る方法と場の設定				
	■その他，困っている内容があれば，記入してください。					
問3	①　道徳の授業に関する校内研修について，右の該当する欄に「1」の数字を付けてください。					
	②　上記①の4，3に「1」を付けた場合は，次のア～エのうち，特に課題と感じている内容に「1」の数字を付けてください。（複数回答可）					
	ア	道徳の授業に関する研修時間				
	イ	道徳の授業に関する研修内容				
	ウ	道徳の授業に関する研修の講師招聘・連携				
	エ	道徳の授業に関する研修の教職員のニーズの把握				
	■その他，困っている内容があれば，記入してください。					
問4	①　道徳の授業における各教科等との関連を図る指導について，右の該当する欄に「1」の数字を付けてください。					
	②　上記①の4，3に「1」を付けた場合は，次のア，イのうち，特に課題と感じている内容に「1」の数字を付けてください。（複数回答可）					
	ア	道徳の授業における道徳教育の全体計画（別葉）を踏まえた指導				
	イ	道徳の授業における各教科等の関連を図る指導方法の工夫（発問の工夫等）				
	■その他，困っている内容があれば，記入してください。					

問5	① 道徳の授業に係る年間指導計画の作成とその活用について，右の該当する欄に**「1」**の数字を付けてください。	4 困っている	3 まあまあ困っている	2 あまり困っていない	1 困っていない
	② 上記①の4，3に「1」を付けた場合は，次のア～ウのうち，特に課題と感じている内容に**「1」の数字**を付けてください。（複数回答可）				
	ア 道徳の授業に係る年間指導計画の作成方法				
	イ 道徳の授業に係る年間指導計画の効果的な活用				
	ウ 道徳の授業に係る年間指導計画への評価・改善				
	■その他，困っている内容があれば，記入してください。				
問6	① 道徳の授業の特質（小学校では，道徳的価値の自覚を一層促し，そのことを基盤としながら，児童が自己の生き方に結び付けて考えること，中学校では，道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方について自覚すること）を踏まえた指導について，右の該当する欄に**「1」**の数字を付けてください。	4 困っている	3 まあまあ困っている	2 あまり困っていない	1 困っていない
	② 上記①の4，3に「1」を付けた場合は，次のア，イのうち，特に課題と感じている内容に**「1」の数字**を付けてください。（複数回答可）				
	ア 道徳の授業の特質の理解				
	イ 道徳の授業の特質を踏まえた指導				
	■その他，困っている内容があれば，記入してください。				
問7	① 道徳の授業の構想について，右の該当する欄に**「1」**の数字を付けてください。	4 困っている	3 まあまあ困っている	2 あまり困っていない	1 困っていない
	② 上記①の4，3に「1」を付けた場合は，次のア～キのうち，特に課題と感じている内容に**「1」の数字**を付けてください。（複数回答可）				
	ア 児童生徒の実態把握				
	イ ねらいの設定				
	ウ 資料の吟味				
	エ 資料の分析				
	オ 発問の構成				
	カ 学習指導過程の構想				
	キ 事前指導・事後指導				
	■その他，困っている内容があれば，記入してください。				
問8	① 道徳の授業における指導方法について，右の該当する欄に**「1」**の数字を付けてください。	4 困っている	3 まあまあ困っている	2 あまり困っていない	1 困っていない
	② 上記①の4，3に「1」を付けた場合は，次のア～ケのうち，特に課題と感じている内容に**「1」の数字**を付けてください。（複数回答可）				
	ア 読み物資料の利用				
	イ 資料を提示する工夫				
	ウ 発問の工夫				
	エ 話合いの工夫				
	オ 書く活動の工夫				
	カ 動作化，役割演技等の表現活動の工夫				
	キ 板書を生かす工夫				
	ク 説話の工夫				
	ケ ICTの利用（パソコン等）				
	■その他，困っている内容があれば，記入してください。				
問9	① 道徳の授業における家庭や地域社会との連携について（例：ゲストティーチャーとしての授業参加，地域教材の開発等への協力等），右の該当する欄に**「1」**の数字を付けてください。	4 困っている	3 まあまあ困っている	2 あまり困っていない	1 困っていない
	② 上記①の4，3に「1」を付けた場合は，次のア～エのうち，特に課題と感じている内容に**「1」の数字**を付けてください。（複数回答可）				
	ア 地域社会等における人材の把握				
	イ 連携する時間の確保				
	ウ 連携する方法				
	エ 継続的な連携				
	■その他，困っている内容があれば，記入してください。				
問10	① 道徳の授業における評価について，右の該当する欄に**「1」**の数字を付けてください。	4 困っている	3 まあまあ困っている	2 あまり困っていない	1 困っていない
	② 上記①の4，3に「1」を付けた場合は，次のア～エのうち，特に課題と感じている内容に**「1」の数字**を付けてください。（複数回答可）				
	ア 評価の観点				
	イ 評価の方法				
	ウ 評価の場面				
	エ 評価の妥当性・信頼性				
	■その他，困っている内容があれば，記入してください。				
問11	問1から問10の中で，特に課題となっている項目番号及びその理由を，記入してください。	質問項目番号			
		理由			
問12	道徳の授業の評価に係る取組例（評価方法，評価場面等を含めて）があれば，記入してください。				